
クラス担任ひとみん

RYU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラス担任ひとみん

【Nコード】

N6674C

【作者名】

RYU

【あらすじ】

クラス担任ひとみんによって、クラス・生徒会・学校・その他大勢が、被害にあったり呆れたりポカーンとしてしまう学園ドタバタコメディです。

休み明けのメガネ

月川高校1年5組は俺が通っているクラス。

「未来。夏休みはどうだった？」

未来というのは俺の名前で、正確には二宮未来^{このみや みらい}。そして、話しかけてきた男は、佐々木透^{ささき とう}。俺と同じ軟式野球部で、キャプテンをやっています。

1年にして透がキャプテンなのは、この春俺たちによって設立した部活で、最初のほうは部活を設立するのは大変だと思って、そう簡単にはいかないと思っていただけ、とんとん拍子に話が進んで始動した。

これも全て、担任のおかげなのですが・・・

「中学のときと比べて宿題が多くて、答え写すのもやっとだった」「だよな〜」

夏休み明けというのもあって、どこもかしこも夏休みの話題とやる気のないオーラに溢れています。

ガラガラ。

担任のひとみんが入ってくると、全員がダラダラと自分の席に向かう。

「え〜と、高校生として初めての夏休みはどうでしたか？」

ひとみんこと熊谷ひとみは、シオルダーヘアに黒縁のメガネをしている。普段はメガネはしていません。だからと言って、コンタクトをつけているわけでもありません。ひとみんは別に視力が悪いわけではありませんから。

身長は150cmぐらいで小柄であり、教師になってあまり年が経っていないために、不思議な行動をとることが多い。というよりも、経験とか関係なくくらいに変。

「返事がありませんよ〜。それじゃあ・・・透君は何をしたのかな？」

ひとみんは透を勢いよく指差した。高校生にもなつて、夏休みのことをクラスの人に話すのは、かなり恥ずかしい。というか、言わせるなよひとみん!!!

しかし、俺たち軟式野球部はひとみんに絶対に逆らえません。ひとみんは、軟式野球部の顧問かつ監督です。

別に、これといつてなにもしないけど・・・なぜか、チアリーダーの格好で来るけど・・・

「え〜と、先生は夏休みどうでしたか？」

透は、ひとみんに話を返すことによつて難を逃れた。

「先生は、海に行つてきました〜」

ひとみんは、うれしそうに話し始めた。もう、身振り手振りを加えて。

「海つて大きいんですよ。どこまでも続いていそうでした」

とりあえず、ひとみんの水着姿を想像してみる。ごめんなさい。

先生はどつからどう見ても子供です。

「それですね〜。知らない人に車に連れ込まれました」
えっ？

「皆さんは知らない人の車に乗つてはいけませんよ〜」

それつて、誘拐されてるんじゃないですか!？つてか、ひとみんも乗つてはいけません!!!

「ま〜、こんなところですかね」

ひとみん・・・続きは？

「あつ、そうそう今学期から転校生がこのクラスに来ることになりました」

どうやら、続きはないようですね・・・ん？転校生？

クラスメイトみんな目をキラキラしています。

「そんな目で見ないでください・・・」

誰もひとみんは見ていません!!!

「先生!!!男子ですか?女子ですか?」

「先生は女子です!!!男子に見えますか?」

ひとみんのことは聞いていません。あと、ひとみんは女ではあっても女子ではないと思います。見た目を除けば。

「それでは、入ってきてください」

ひとみんはマイペース過ぎです。少しは、俺たちのことを考えてください。

ガラガラ。

俺を含むクラス全員が扉のほうに目を向けた。その瞬間
パンパンパンパン

ひとみんはどうしてクラッカーを両手に溢れんばかりに持っているの？そして、どうしてそんなに一所懸命に鳴らしているの？そんなことしたら・・・

「なにかありましたか？」

ほら、隣のクラス担任の人が来ちゃったじゃない。

ひとみんは、クラッカーを鳴らした経緯について話しています。

その結果、俺たちは、教師が教師に本気で怒られるというこのクラスでは当たり前な、しかし、他ではほとんど見ることがない光景を見ることになりました。

転校生は・・・まだ廊下です。ほったらかしです。誰か助けてあげてください。

しばらくして、ひとみんが涙目で教壇に戻りました。そして、転校生はまだ廊下です。入るタイミングを思いつき逃しています。

「か、彼女、がてん、ここ、うせ、いの、は、はぎわ、ら、らま、いちゃん、です」

ひとみんが泣きながら話してくれましたが・・・わかりません。つてか、転校生はまだ廊下ですよ？早く呼んであげてください。

「彼女の身長は155cmで、わ、私より高いです。うううううう」

ひとみんは、さつき怒られたから泣いてるの？それとも、身長が負けたから泣いてるの？でもね、本当に泣きたいのは転校生のほうだと思いますよ。

「あ、あの〜」

我慢できずに転校生が入ってきたようですね。

シヨートツインテールで一目でかわいいとわかる子に皆釘付けです。俺も釘付けです。

「ど、どうして入ってこなかったの？」

ひとみん！あなたのせいです。

「自己紹介してね」

なぜかひとみんは泣き止んでいます。

「萩原舞って言います。よろしくお願いします」

やっと、彼女の名前が判明しました。舞ちゃんらしいです。

「あ、あれ〜先生よりも舞ちゃん身長低いんだね」

確かに、並んでみると彼女のほうが小さいです。ひとみんが爪先立ちをやめない限りは。

「本当ですね。先生157cmぐらいあるんじゃないですか」

舞ちゃんはなぜかのっちゃってるし・・・

先生は先生で喜んでるし・・・

キンコンカンコン

朝のホームルームの時間が終わったようでは何よりです。

「先生。舞ちゃんの席はどこにするの？」

どこからともなく聞こえてくる女子の声にひとみんは・・・慌ててクラツカーをクラスの皆に配ってるし・・・

「空いてるところにどうぞ」

ひとみんは投げやりに答えて、またクラツカーを配り始める。ひとみんは何がしたいの？ってか、空いてる席は俺の隣しかないわけ・・・自動的に舞ちゃんの席は決定です。

なんだかんだで、今日の授業も終わって放課後です。

「未来。今日の練習は、人数半分のいなからなしで」

風のようにやってきた透は、それだけ言っと風のようにどこかへ行ってしまいました。

軟式野球部は、こんなことが日常茶飯事です。理由は・・・また今度お話しします。

ひとみんなが赴任してきてから今までの半年にもいろいろあったのですが・・・それもまた今度という事です。ま、何はともあれ我々ラス担任のひとみんなは、これまでもこれからも頑張っていくとさ。

休み明けのメガネ（後書き）

今回のコメディはドタバタ系です。“くくからから”とは違う作品を書きたいな〜と思い・・・思いつきで一気に書きました。思いつきで書いたので、話はグツチャグツチャです。ごめんなさい。

これからの話もまだ模索中。今後の展開に自分でも期待しています。いや、むしろ不安です。連載続けられるかな？

何はともあれ、これから“クラス担任ひとみん”をよろしくお願ひします。

部活設立のエトセトラ

今回は部活設立のときの話をしようと思います。それは、忘れもしない4月末の放課後のことでした。俺は、中学時代から仲が良かった佐々木透と軟式野球部を作ることにしたのです。

「部活作るのって大変なんだよな」

俺たちは、部活を作りたかったのですが、その作り方を大雑把にしか知りませんでした。それでも、生徒会に承認が必要とか、校長に許可をもらわなくてはいけないというのはどことなく知っていました。

悩んだ結果、何からはじめて良いのかわからないので、担任に聞きに行くことにしたのです。

それが、正解であり間違いだったのですが・・・

その頃にはもう、担任ひとみんなこと熊谷ひとみの変人ぶりを知っていました。しかしながら、少なくともアドバイスぐらいはもらえると行って行ったのです。

「先生。部活について知りたいんですが・・・」

「部活について知りたいの？ちょっと待ってて」

ひとみんなはそう言うと、引き出しの中から辞書を取り出して、なにやら探し始めたのです。

「なにしてるんですか？」

透がすかさず聞きます。すると先生は、

「間違ったことは教えられないから、辞書で調べてから部活についての説明をしてあげる」

ひとみんな。俺たちは別に部活自体の意味は知っていますよ。

「え」と、部活の意味じゃなくて、部活の作り方を知りたいんですが・・・」

透は冷静です。

「そうなんだ」

ひとみんは勘違いに気付き、辞書をしまいました。そして一言「砂糖とかみりんで作れないかな？」

とつぶやきました。絶対作れないと思います。ってか、どうやって作る気ですか？

「先生は知らないようなので、生徒会に行つて聞いてきますね」

俺がそう言つて話を打ち切ろうとしたときに、ひとみんが

「私も行く」

えっ！？付いて来るんですか？断れなかつたので、ひとみんを連れて生徒会に行くことになりました。

彼女はとつても張り切つているようだった。きっと、生徒に頼られたことがあまりないんですね。

「たのも〜」

ひとみんは、扉が破壊されんばかりに勢いよく開けました。

俺たちは道場破りに来たわけではありませんよ。

「な、なんですか？」

メガネの位置を直しながら、生徒会長こと・・・会長は言葉を発した。正直言つて、会長の名前は知らない。だって、みんな会長と呼んでるもの。

会長は、この学校始まつて以来の女性会長で、少し長い髪をポニテールヘアーにしている。目は鋭く、恐い印象を受けるが、実は天然だという噂がある。ホントかどうか知らないけど・・・

透は、ひとみんが用件を話す前に話した。この透の判断は正しいといえよう。ひとみんに説明させたら、話が伝わらないだろうから「そんな急に部活を作りたい言われても困ります。まずは、愛好会を作つて、人数や実績が伴つた後に部になるので」

俺たちは、愛好会からはじめても良いと思つた。というより、それが当たり前だと知らされたので、そうしようと思つた。ひとみん

は以外は

「賄賂を渡してもダメですか？」

ひとみは何を言ってるの？

「物によります」

会長も何を言ってるの？

「砂糖ならここにあるんですが」

そういうと、ひとみはスーツのポケットの中から砂糖の袋を取り出して、机の上に乗せた。

「1個では、了承しかねます」

「何個なら良いんですか？」

なんか、話が進んでるし・・・

「5個ならば手を打つても良いですよ」

「それならばなんとかあります」

ひとみは、同じポケットから砂糖を次々と取り出した。ひとみのポケットは 次元ポケットですか？

会長は満足したようで、書類を準備してくれた。

「この書類を校長先生が承諾してくだされば、部が設立となります。私ができるのはここまでです。きつと、そう簡単には承諾してくれないと思いますが・・・」

「校長先生にも賄賂を渡すので大丈夫です」

ひとみは意気揚々と生徒会室を出て行きました。透もついて出て行きました。もはや子分のようなのです。仕様がなかったので、俺は会長に頭を下げて部屋を出ました。

ところで、どうして会長は砂糖が欲しかったのでしょうか？

「これで、お菓子がいっぱい作れる」

理由は、ごく簡単だったようです。

俺は、生徒会室の前から校長室に向かいました。

会長は、人前ではしっかりしてる人のようですが、それ以外だとかわいい人のようです。そのギャップで、天然と言われているのでしょう。

ひとみんは、校長室の前でいろいろ調べまわっています。

「学校で一番偉い人だから、トラップの1つや2つぐらい……」
絶対にはないと思います。

「よし、突入」

ひとみんを先頭に俺たちは入りました。

「なんのようかね？」

かなり威厳のある言葉使いです。さすが校長です。

ここでも透が説明をします。生徒会に賄賂を渡したことは内密にして。

「そうか。しかしな〜そうすぐ部を作るといつても無理なものは無理だ」

断固拒否です。これは無理そうです。

「賄賂を渡しても無理ですか？」

やっぱり賄賂を渡す気なのですね。

「そういうものは受け取れない」

さすがに校長です。しっかりしています。これでは、ひとみんもどうすることも……

ジャバー。ジャバー。

ひとみんは、ポケットから何を出しているの？

「みりんならあるんですけど……」

ひとみんはポケットに両手をつ突っ込んで液体を取り出し、撒いています。

「ちよっ、ちよっと何をしてるのですか君は？」

「足りませんか？」

ひとみんはなおも撒きます。

これでは、賄賂を渡してるのではなく、脅迫です。

「わ、わかったから」

校長はついに折れてしまい、承認してくれました。みりんの処理は、透と俺でやりました。

今回唯一俺が働いた場面でした。もう一瞬、俺要らないんじゃないかと思いました。

そして、ついに部はできたのでした。もちろん、顧問はひとみんです。

次は部員の募集です。1週間の期間にもかかわらず、結構入部届けがきました。

ひとみんは、次々に入部届に了承の判子を押していききましたが、俺たち2人を合わせて9人になると、判子を置いてしまいました。

「先生どうしたんですか？」

透が聞くと

「9人以上になると、補欠ができてかわいそうだから・・・」

ひとみんは、他の入部届を破り捨てました。

俺たちは、なすすべなくそれを啞然としてみていました。

「先生・・・怪我とかしたらどうするんですか？」

「私が怪我するわけじゃないでしょ!!」

「いや、先生じゃなくて、俺たちが」

その問いに、先生はさらりと

「私が出る」

と言って、張り切っていました。

その後わかったことですが、俺たちは高校生の大会ではなく、社会人の大会に出ることになっていたのでした。

「ポジションとかもありますし・・・」

透は正論を言いました。

「監督に文句があるんですか？」

ひとみんは、監督らしいです。今知りました。

透は、あきらめたようです。9人で頑張るようです。後姿が寂しいです。

俺たちがひとみに助太刀を頼んだのは、正解だったのでしょうか？間違いだっただけでしょうか？俺にはわかりかねます。

こうして軟式野球部は1週間にして始動したのでした。

結局ひとみんは、砂糖とみりんと次元ポケットで部活を作ってしまった。御見それしました。この世に絶対はないのだと感じました。でも、部活にチアリーダーの服装で来るのはどうなの？

ひとみん曰く

「応援があつたほうが良いでしょ」
だそうです。

とりあえず、軟式野球部はひとみに逆らえないのは確かです。だって、一所懸命応援してくれるんですから。

部活設立のエトセトラ（後書き）

なんとか2部を書き終わりました。いつもながら、ひとみんなが活躍しております。

これからの予定ですが、月1ぐらいで載せられればいいかなと
思っておりますのでなにとぞよろしくお願いいたします。

感想・意見をおまちしております。

練習試合のメイド

これは6月のことでした。ひとみんは軟式野球部を集めてミーティングをしたのでした。

「明日練習試合だから」

ひとみんは、そういう言うと立ち去っていきました。

集合時間はいつですか？何時から試合ですか？ポジションは？

俺たちは、集合時間をひとみんから聞き出して集合したわけですが・・・

「ひとみん遅くね？」

ひとみんが来ていないのです。そして・・・

「プレーボール！！」

ひとみんが言ったのは、集合時間ではなくて試合開始時間だったのです。

とりあえず俺たちは、ポジションや打順を前もって決めておこうと言うことで時間より前に来ていたので、相手チームに迷惑をかけずに済みました。

それでも、時間的には全然余裕がありませんでしたけど。

相手チームはおじさんのチームです。平均年齢は40歳ぐらいでしょうか？ユニフォームは、赤と白のストライプです。

対するこちらチームは、年齢15〜16歳の若者です。ユニフォームは豹柄です。ひとみんが勝手に作ってくれました。ありがた迷惑もひとみんのチアリーダー姿を見ると、受け取らずにいられますんでした。

ひとみんのチアリーダーの服装は、少しおへそが見えます。きつとひとみんは身長サイズで買ったのでしょう。しかし、ひとみんの胸はちよつとだけ大きいのでサイズとのズレが出てしまったようです。

どのくらいの大さかには皆様にお任せします。俺は健全な高校生なので、そういうことは判断できません。

ひとみんは、6回の表にやってきました。もちろんチアリーダー姿で。なぜか、眠そうです。

「遅れてごめんね。あら、まだ怪我してる人いないの？つまんない」

ひとみんはさらりと暴言を吐いて、ベンチに座ります。

練習のときは応援してくれるのに、試合は応援してくれないんですね。

俺たちの中では、ひとみんはできるだけ試合に出さないように気をつけることにしました。だって、試合に出てひとみんが怪我したら可哀想ですもん。そんな俺たちの気遣いにも気付かず

「試合に出たい。だれか怪我してよ」

と、ひとみんは言っていました。

普通監督はそんなこと言いませんよ。

相手のチームのかたがたも目を白黒させていました。当然ですよ。いきなり現れたチアリーダーがベンチに座って駄々をこねているんですから。

時は進んで、8回の裏です。俺たちのチームは先攻だったので、守りに付いています。ピッチャーは透です。現在は、5対5の同点。ツアアウトランナーなしです。

透が投げた球は、キャッチャーに向かって進みます。しかし、打者も黙っていません。振り下ろしたバットが球を捕えます。そして、その球は透に向かって飛んでいきました。透の胸の辺りに当たり転がります。透はその球をすかさず1塁に送りました。結果はアウト。チェンジです。透が苦しそうな顔をしてふさぎこみました。俺たちは、透をベンチに運びました。

「大丈夫か？」

チームメイトの1人が声をかけます。重要な人物ではないので少年Aとしておきましょう。

「ちょっとつらいな」

透がそういうと

「私の出番ね!!!」

ひとみんなが立ち上がったってどっかに行ってしまった。しばらくして、ひとみんなはメイド姿になって現れたのです。

「どうしてメイド服なんですか?」

少年Aが聞きます。ひとみんなの答えは

「戦闘用」

そうですか。

きつとひとみんなは、それを作するために徹夜をしたんですね。だから眠そうだったんですね。そして、そのメイド服をみんなに見せたいがために他人の怪我を楽しみにしていたんですね。

「行ってくるね」

ひとみんなはそう言って、バッテリーボックスに向かいました。そうです。この回は透の打順からだったのです。でもね、ひとみんな……どうしてバッテリーを持っていかないの?どうしてヘルメットをしないの?

ひとみんなはポケットに手を入れました。

もしかして、また 次元ポケットですか?

そして、ひとみんなのポケットから出てきたのは……モップとヘッドドレス……。

どういうことですか?とりあえず、俺たちはひとみんなを呼びました。

「なんで、モップとヘッドドレスなんですか?」

今回は、透負傷のため俺が質問します。少年Aに任せても良いのですが……キャラが不明なので

「モップはバッテリー!ヘッドドレスはヘルメットの代わり!!!」

「代わりって……バッテリーもヘルメットもあるんですから、使ったら良いじゃないですか!!!」

「メイドがそんなの使ったら変じゃない」

メイドがここにいるコトのほうが変なのでは？

俺は聞き分けのないひとみんのヘッドドレスつきの頭を軽く叩きました。

「ね！痛いでしょ！それじゃあ、頭を守れないんですよ」

これは、ひとみんのためです。ひとみんに怪我をさせないためです。心を鬼にします。

「い、痛くありません。もう良いですか」

ひとみんは涙目です。絶対痛かったでしょ。しかし、彼女はバツターボックスに向かってしまいました。俺たちはしょうがないので、ひとみんが怪我をしないように祈るだけです。

審判は、そんな彼女の姿を見てスルーしてるし……。

1球目は、ど真ん中にストレート。ひとみんは、見事に空振りしました。このまま3振で終わってくれば良い。俺たちは全員そう思いました。

2球目。ストライクからボールに抜けるカーブです。ひとみんは、またも空振りです。あと1球でひとみんの打席が終わります。ところろが……

「やっぱりこれじゃあダメだね」

ひとみんはそういうと、ポケットにモップをしまつて……違うモップを取り出しました。

なんか意味があるんですか？結局モップじゃないですか！ミートポイントほぼゼロですよ。しかし、ひとみんは意気揚々と素振りを始めた瞬間俺たちはモップを変えた意味を知るのでした。

「素振り見えね〜」

少年Aが言います。そうです。バットを振るのが早すぎて、全然見えないのです。ひとみんはいつたい何者なのでしょう？

ひとみんはバツターボックスに立ちます。

バッテリーがタイムをかけて相談をしています。きっと、さっきの素振りを警戒しているのでしょう。そして、キャッチャーが守備位置に付きました。

「プレイ」

審判の音が響きました。ピッチャーが振りかぶって投げました。その球は、100%ボールです。バッテリは、敬遠を選んだのです。しかし、バッテリはある勘違いをしていました。

モップって、普通のバットより断然長いんですよ。
カーン。

なぜか金属音が響いて、球はホームランゾーンに飛んでいきました。6対5になりました。ひとみんは、満面の笑みでベースランをしています。ピッチャーはうな垂れています。

そのあとの我高校の打席は、少年B・C・Dでしたが、書く必要がないぐらいにあっけなく終わりました。

9回の裏。これを守りきれば勝てます。しかしながら、こちらにはピッチャーがいません。

「私がやる」
短い言葉に威圧をこめてひとみんが言います。俺たちは納得させられました。

ひとみんがマウンドに立ち振りかぶって、アンダースローで投げます。手が地面ギリギリで完璧な軌道を描きました。ひとみんの手を離れた球は、ものすごい勢いでキャッチャーミットに向かいます。龍が見えるのは気のせいですね？

ひとみんが投げた球を受け止めたキャッチャーは、後ろに飛ばされて気を失ってしまいました。

相手チームもこっちチームもみんなポカ〜ンです。

こちらに代わりの選手がいないので、試合終了です。もちろん俺たちの負けです。

ひとみんに一喜一憂の練習試合でした。

この試合以後は、違う意味でひとみんを試合に出せなくなりました。また、チアリーダーで応援してくれるからだけではない理由で、逆らえなくなりました。

ひとみんの戦闘値はいつたどのくらいなのでしょう？そして、ひとみんは何者なんでしょう？

ちなみに俺は、シヨートで打順は1番でした。透は、ピッチャーで4番でした。ということ、透のポジションを引き継いだひとみんは、最強のピッチャーで最強の4番で最強のメイドでしたとさ。

練習試合のメイド（後書き）

遅くなって本当に申し訳ありませんm（| |）m前の投稿…去年の9月ですね。もう読んでくれてた人はいないですね（・・）（・・）次の更新は気長にお待ちください。もうないかもしれませんし（`・`）（`・`）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6674c/>

クラス担任ひとみん

2010年10月29日01時45分発行